

研究ノート

幼児教育現場の音感教育 —ガラスコップの水の量に着目して—

山田真治*1

キーワード：絶対音感、好奇心、認識、集中力、環境

1 はじめに

音感という特別な人にあるものと思われがちであるが、訓練によりある程度身に付く能力とはあまり知られていない。音感について尋ねてみると、殆どの人が「私には音感がない」、「私は音痴だ」、「音痴だから歌が下手である」等と言った答えが返ってくる。このことは音楽的な行動を起こした時（歌を歌う、楽器を演奏する等）自分の理想としている音が出せなかった事を理由に、自分なりの判断で思い込んでいるように思われる。つまり音感とは何か、音痴とは何か、と言うことが理解できていないままにその言葉を使用しているのである。そこで本研究では、音感とは何か、音痴とはどういうことなのかを明らかにしながら幼児に音感を付ける上で、より効果的な訓練方法を見出すことにした。訓練には、幼児教育、保育現場で使用可能、且つ身近に手に入るガラスコップを使用することにした。ガラスコップは水の量によって様々な音程を出す性質を持っている。水での音程作りを思い立ったのは、長年筆者が、ピアノ調律師養成学校にて教鞭を執っていた経験によるものである^{註1}。ピアノ調律師養成学校では、調律師になる為にピアノの弦を伸縮しながら音を合わせる訓練を1年から2年行っている。卒業率は毎年95%以上、卒業できない5%の学生は技術的能力ではなく、家庭の事情であった。すなわち殆どの学生が、音を合わせる能力、音程を認識する能力を身に付け卒業しているのである。よってガラスコップも同様に水の量で音程が変わるので水の量による音の違いの訓練を行えば音感を養うことが可能であると推

察した。人間は、音の高さが変わる瞬間、多大な集中力を発揮する^{註2}。集中力で得た能力は発達段階における幼児期においては絶対的な能力に発展するものと推察する。幼児期には音感の中でも絶対音感が著しく発達すると言われているが、身近にある水とガラスコップで絶対音感の発達の可能性を明らかにしていきたい。

2 音感の種類

(1) 絶対音感

絶対音感 absolute hearing [英] とは、「ある音が単独に与えられた時、それを他の音に音程的に関連づけずに、それ自身として聴いて、しかもその音の音名を正しく名指しできる能力¹⁾」と言われるもので、一般的に相対的判断は容易であるが、絶対的判断はより困難で、聴覚的弁別の素質と訓練とによって形成される。絶対音感の本質は絶対調性にあり、一定の振動数をもって示す音の高さの記憶により、これを基礎にして任意の音または同時音群についての高さの判断、再生、認識が可能になる。絶対音感の取得は、中音域においては比較的容易であるが、高音域、低音域の音域になると取得は困難である。

(2) 相対音感

相対音感 relative hearing [英] とは、絶対音感に対する語で、特定の音名の音を基準にして特定の音を作り出したり識別したりすることである²⁾。

(3) 音痴

音痴 tone-deafness [英] とは狭義には音の高さの弁別の貧弱なものをいう。通俗的には歌唱に際して音

*1 山口福祉文化大学 ライフデザイン学部

程のきわだった崩れを出すもの言う。また広義には音楽的聴覚的因子の貧困に対して意味する社会的習わしもある³⁾。

3 音感訓練

(1) 準備

① 対象年齢と人数

対象者は、山口県萩市内の同一幼稚園に通う年中の5歳児、男子3人、女子1人の4人である。同一幼稚園に選定したのは、園児の友人関係によるものである。音感訓練は緊張感を要するので、見知らぬ人がいると子どもたちは訓練に溶け込めない事が想定された。なるべく子どもたちには遠慮なく回答してもらえるように現場は幼稚園の友人関係を重視し、緊張感の緩和に配慮した。

② 訓練場所・環境

訓練の場所は、山口福祉文化大学情報教育棟、音楽室である。長テーブルの前に横一列で並んでもらい、ガラスコップの水の量が見えるように配置した。子どもの後ろには親も同席してもらい、子どもの集中力が散漫した時は親が子どもに注意をし、集中力の配慮に協力して頂いた。

③ 使用楽器

ガラスコップは25個準備した。水を入れた時、何れも一点ド音から一点ソ音までの音が出るコップを選定した。シロフォンの撥2本、グロッケン奏の撥2本、正確な音が必要な為、グランドピアノ1台を使用することにした。

④ 個人の音楽学習状況と家庭での環境状況

訓練が音に関する事なので個人の音楽学習状況、家庭での環境状況を把握することにした。

A 幼児 (女子)

母は、子どもの頃からピアノを習っていた。途中で止めたが子どもが習い始めたので(萩市内個人音楽教室)再び一緒に習い始めた。家庭には電子ピアノが有り、母子共に毎日楽しく練習している。A幼児は、現

在ピアノを習い始めて9ヶ月になる。

B 幼児 (男子)

母は、小学校6年生から中学校2年生までピアノを習っていた。現在は、習っていないが楽譜はかなり読むことができる。家庭には電子ピアノが有り、練習はできる環境である。現在は、萩市内楽器会社の音楽教室に2歳から通っている。教室ではグループレッスンで個人指導は受けていない。

C 幼児 (男子)

母は、ピアノ経験がない。家庭には電子ピアノが有り、練習はできる環境である。現在は、萩市内楽器会社の音楽教室に通い、通い始めてから8ヶ月になる。教室ではグループレッスンで個人指導は受けていない。

D 幼児 (男子)

母は、ピアノ経験がない。家庭にはキーボードが有るが、殆ど弾いていない。現在は、ピアノを習う等の音楽教育は受けていない。

⑤ 訓練期間、時間

実習期間は1月11日から3月28日までの約2ヶ月半。1回の訓練時間は約45分、全部で10回の訓練を行った。時間帯は幼稚園終了後、16時から16時45分まで。幼児にとって一日の疲れが出る前の時間を設定し、集中力になるべく欠けないように留意した。

(2) 訓練内容のプログラム

1回目

・音感の確認

一点ドから一点ソまでの5音をピアノで適当に弾き、音を当てさせる。その際、音の出し方は、「感」で音を答える可能性があるので跳躍進行で行うことにした。音の正解、不正解はその場で子どもたちには教えず記録しておく。

・ガラスコップに慣れさせ、コップから出てきた音に興味を持たせる。

・ガラスコップに水を入れ、一点ドから一点ソまでの音階を作り子どもたちに聴かせる。

・水の量によって音が変わることを認識させる。

- ・ガラスコップの音作りは、子どもたちでは微妙な水の量の加減が、困難且つ、ガラスコップの破損の恐れが想定されるので、指導者が音を作る。子どもたちには水の量で音に変化することに気付かせる。
- ・ピアノで一点「ド」の音を子どもたちに確認してもらい、ガラスコップで一点「ド」の音を作り、子どもたちに覚えさせる。

2回目

- ・2回目以降は1回目と同様、最初に一点「ド」から一点「ソ」までの5音をピアノで弾き、音を当てる音感確認を行う。音の出し方は1回目と同様、跳躍進行で行う。音の正解、不正解はその場で子どもたちには教えず記録しておく。
- ・ピアノで一点「レ」、「ミ」の音を確認し、ガラスコップで一点「レ」、「ミ」の音を作り、子どもたちに覚えさせる。

3回目

- ・音感の確認
- ・ピアノで一点「ファ」、「ソ」の音を確認し、ガラスコップで一点「ファ」、「ソ」の音を作り、子どもたちに覚えさせる。

4回目から7回目

- ・音感の確認
- ・3回までの訓練で一点「ド」から一点「ソ」までの音の認識は終了したので、一人一人に一点「ド」から一点「ソ」までの中から好きな一音を選んでもらう。その際、子どもたちには音が重ならないように留意する。
- ・選んでもらった音を子ども本人の指示により水の加減を口頭で言ってもらい、本人が合っていると思われる音になったら水加減を決定する。
- ・本人が水の量を決定してできた音が合っているかをピアノで確認する。その際指導者は、作られた音に対して正解、不正解のアドバイスを出す。

8回目・9回目

- ・音感の確認

- ・4回目から7回目の訓練を生かし、一点「ド」から一点「ソ」までの音を作ってもらい。水加減は、口頭により調整してもらい。
- ・水の量が見えないように配慮。水の量を視覚的に覚え、音を判断することを避けるためである。
- ・音の作成においては、順次進行で作るのは避け、跳躍進行で作成することにした。

10回目

- ・音感の確認
- ・1回目から9回目の訓練を生かし、10回目は違った音の中から正しい音が認識できるかの検証である。別室で行うので絶対音の認識ができるかの検証でもある。
- ・一列にガラスコップ5個並べる。一点「ド」から一点「ソ」までは5音あるので5列、コップは25個になる。ドレミファソの正しい音を一列の中に其々一音ずつ入れておく。他の4音は違った音である。子どもには音の情報は何も与えず、別室に一人一人入り、正しい音を見つけ出してもらい。集中力が欠けないように親にも同席して頂き、集中力が欠けた時には親に注意をしてもらう。
- ・8回目、9回目で「ド、レ、ミ、ファ、ソ」の音を作ってもらっているが、其々が、その時に作成した音の順番は避けるようにした。

4 訓練内容の結果

(1) 1回目の結果

- ・音感の確認
 - 一点「ド」から一点「ソ」までの5音を指導者がピアノで無作為に選び子どもたちに当てさせたが、A 幼児以外は、誰も音を当てることができなかった。
- ・5個のガラスコップにそれぞれ異なる量の水を入れ、木琴の撥で好きなように子どもたちに叩かせ音を出させる。子どもたちは、音に反応し興味を持ち始めた。好きなように叩いているとやがて誰もが違ったコップを叩くようになった。子どもたちの興味は増

していき、徐々に叩き方が強くなる。子どもたちの集中力はガラスコップに集まり、完全にガラスコップの世界へ入っていった。自分の音が友達の音に消されないように我も我もと自分の音を大きく出すようになり、叩き方が強くなっていった。子どもたちの興味がピークに達した時、グラスを鳴らすことは中止させた。

・次に5つのガラスコップに水を入れ「ド、レ、ミ、ファ、ソ」の音階にしたところ、子どもたちは更に興味津々となり歓声を上げた。恐らく水の量により「ド、レ、ミ、ファ、ソ」音階になった事、きれいに音が整理された事に子どもたちは感動したのだろう。

・一点「ド」については、ガラスコップの音が認識できなかったが、ピアノで正しい音を出して水加減を変えていくと次第に音を認識するようになり全員、「ド」の音を作ることができた。

(2) 2回目、3回目の結果

2回目は「レ」「ミ」、3回目は「ファ」「ソ」の音を覚える訓練であったが、問題なく水の加減に興味を持ちながら音を覚えることができた。

(3) 4回目から7回目の結果

4回目から7回目は一人一人に一点「ド」から一点「ソ」までの中から好きな一音を選んでもらい、選んだ音を作ってもらった。訓練は2回行った。結果は次のようになった。丸で囲んだ音は、正確に作ることのできた音である。

4回目

回 幼児	1 回目に 選んだ音	2 回目に 選んだ音
A	ソ	レ
B	レ	ファ
C	ファ	ミ
D	ミ	ソ

5回目

回 幼児	1 回目に 選んだ音	2 回目に 選んだ音
A	レ	ファ
B	ミ	ド
C	ソ	ミ
D	ファ	レ

6回目

回 幼児	1 回目に 選んだ音	2 回目に 選んだ音
A	ミ	ファ
B	レ	ミ
C	ソ	レ
D	ファ	ソ

7回目

回 幼児	1 回目に 選んだ音	2 回目に 選んだ音
A	ミ	ファ
B	ソ	レ
C	レ	ミ
D	ファ	ソ

(4) 8回目、9回目の結果

4回目から7回目の訓練を生かし、一点「ド」から一点「ソ」までの音を作ってもらった。丸囲みの音は、正確に作ることできた音である。

8回目

作成順 幼児	1	2	3	4	5
A	ファ	レ	ソ	ド	ミ
B	レ	ファ	ド	ミ	ソ
C	ミ	ド	ソ	レ	ファ
D	ソ	ミ	ド	ファ	レ

9回目

作成順 幼児	1	2	3	4	5
A	レ	ファ	ド	ミ	ソ
B	ミ	ド	ソ	レ	ファ
C	ソ	ミ	ド	ファ	レ
D	ファ	レ	ソ	ド	ミ

(5) 10回目の結果

10回目は1回目から9回目の訓練を生かし、違った音の中から正しい音が認識できるかを検証した。ガラスコップを1列に5個並べる。音は「ド」から「ソ」までであるので5列になる。表1の●は、指定された音の列の正しい音の出るコップである。○は、指定された音とは違った音の出るコップである。検証は、「ド、レ、ミ、ファ、ソ」の順に行い、コップの音は1から5の順に鳴らしていった。1回鳴らすだけでは答えられなかった幼児がいたが、その際は何度も鳴らし答えてもらった。

表1

コップ 音	1	2	3	4	5
ド	○	●	○	○	○
レ	○	○	○	●	○
ミ	○	○	○	○	●
ファ	●	○	○	○	○
ソ	○	○	●	○	○

検証結果は、表2ようになった。○印は、音が認識できた音である。×印は認識できなかった音である。

表2

音 幼児	ド	レ	ミ	ファ	ソ
A	○	○	○	○	○
B	○	○	○	○	○
C	○	○	○	○	○
D	×	×	×	×	×

(6) 2回目から10回目までの最初の音感確認の結果

・2回目 ○は正解、×は不正解

音 幼児	ド	レ	ミ	ファ	ソ
A	○	○	○	○	○
B	○	○	×	○	×
C	○	○	○	○	○
D	×	○	×	×	○

・3回目 ○は正解、×は不正解

音 幼児	ド	レ	ミ	ファ	ソ
A	○	○	○	○	○
B	○	○	×	×	×
C	○	○	○	○	○
D	○	×	×	×	○

・7回目 ○は正解、×は不正解

音 幼児	ド	レ	ミ	ファ	ソ
A	○	×	○	○	○
B	○	○	○	○	○
C	○	○	○	○	○
D	○	○	×	×	○

・4回目 ○は正解、×は不正解

音 幼児	ド	レ	ミ	ファ	ソ
A	○	○	○	○	○
B	○	○	×	○	×
C	○	○	×	○	○
D	○	×	×	×	×

・8回目 ○は正解、×は不正解

音 幼児	ド	レ	ミ	ファ	ソ
A	○	○	○	○	○
B	○	○	○	○	○
C	○	○	○	○	○
D	○	○	×	×	×

・5回目 ○は正解、×は不正解

音 幼児	ド	レ	ミ	ファ	ソ
A	○	○	○	○	○
B	○	○	○	○	×
C	○	○	○	○	○
D	○	×	×	×	×

・9回目 ○は正解、×は不正解

音 幼児	ド	レ	ミ	ファ	ソ
A	○	○	○	○	○
B	○	○	○	○	○
C	○	○	○	○	○
D	○	×	○	×	×

・6回目 ○は正解、×は不正解

音 幼児	ド	レ	ミ	ファ	ソ
A	○	○	○	○	○
B	○	○	×	○	×
C	○	○	○	○	○
D	○	×	×	×	×

・10回目 ○は正解、×は不正解

音 幼児	ド	レ	ミ	ファ	ソ
A	○	○	○	○	○
B	○	○	○	○	○
C	○	○	○	○	○
D	×	○	×	×	×

5 考察

(1) 4回目から7回目までの結果について

・幼児が選んだ2音の作成結果

・A 幼児

4回目、5回目については、音に対する認識度が不安定に見受けられるが、6回目、7回目については、確実に音の認識ができ、作ることができている。4回目、5回目については、自分で好きな音を選んではいいるが、何らかの不安な要素が入り、集中力が欠けたと推察する。

・B 幼児

4回目から7回目の全体を見てみると、5回目の1回目の音作りだけが不正解を示している。この事は、集中力の欠如と推察する。既に4回目では2音とも正確な音を作ることができており、5回目の最初の音感の確認では「ド」から「ソ」の全ての音が正解になっていることから、幼児の集中力が欠けたと推察する。

・C 幼児

5回目に不正解を示しているが、全体から考えると集中度の欠如と推察する。これは、毎回の最初に行った音感の確認において2回目から5音は全て正解をしていること、また4回目、6回目、7回目の選んだ音においては、全て正解をしていることから、幼児にとっての集中力の欠如の可能性が強いものと推察する。

・D 幼児

選んでもらった音が毎回よく似ていた影響なのか、正解率は非常に高い。自分が好きな音なのか、取りやすい音のかは明らかではないが、5回目から7回目までは選んでもらった音は全部正解を示した。一方、毎回、最初に行う音感の確認では、5回目から7回目で正解を見せた「ファ」は、不正解を示した。この事は、5回から7回までの全正解は、音の認識はできているようにも考えられるが、必ずしも訓練による音の記憶ではないと推察する。

(2) 8回目から9回目までの結果について

・「ド」から「ソ」までの5音の作成結果

・A 幼児

5音全部正解の結果になっているが、訓練による成果なのか、日常のピアノ教室での成果なのか明らかではない。しかし、7回目まででは集中力が欠けての不正解を出していると推察されていたものが、8回目、9回目については全く不正解が無くなっている。この事は、訓練を重ねたことにより集中力が養われてきたものと推察する。

・B 幼児

5音全音正解になっているが、B 幼児については、訓練による成果が大きなものとして推察する。毎回の最初に行っていた音感の確認において4回目までは、40～60%の不正解を示したが、8回目、9回目の音感の確認においては100%の正解率になっている。この事は、訓練による成果が大きく出たものと推察する。

・C 幼児

8回目において「ファ」の音が不正解になった。これは、「ド」から「ソ」までの5音を作成するという事で何らかの戸惑いか、集中力の欠如によるものと推察する。C 幼児は、毎回の最初の音感の確認において、「ファ」の音の不正解は全く無く、不正解は生じても4回の「ミ」の音であった。そのような事から8回目の「ファ」の不正解は集中力の欠如が大きな原因と推察する。また、5回目に2音とも不正解を示しているが、8回目、9回目に正解を示した事は、訓練によって音に対する集中力が付いたものと推察する。

・D 幼児

9回目に正解率を上げているが、8回目については殆ど不正解であった。訓練の成果が出ているのか、出していないのかは、8回目、9回目の結果からは明らかにならないが、「ソ」の音については6回目、7回目の訓練成果で正解を示しているので成果の傾向は出ているものと推察する。

(3) 10回目の結果について

・違った音の中から正しい音を見つけ出す能力

・A 幼児

5音全ての音について正しい音を見つけ出す事ができた。A 幼児は、ピアノ教室で類似した音のトレーニングをレッスンの度に行っているため、今回の訓練によって音感が習得できたということではない。また絶対音感についても備わった傾向を示したが、今回の訓練で得たものとは考えにくい。しかし音が出てから解答までの時間は、初回から比べるとかなり早くなったのは事実で、音に対する集中力は高くなったものと推察する。

・B 幼児

違った音から正しい音を見出すことは、かなり高度な音の検索であるが、B 幼児は5音全てにおいて正しい音を見出すことができた。これは、B 幼児が6回目を最後に、音の間違いが無くなっていることから訓練により着実に音感能力を身に付けてきている結果と考えられ、絶対音感についても付いてきたものと推察する。

・C 幼児

4回目の「ミ」の音を除いて全て正解を見せているので、正しい音を見出すことは何の問題もなかった。10回目の音の検索は、何も音が無い部屋での検索であったので、絶対音感の有無の確認もできた。C 幼児には絶対音感はかなり付いてきていると推察する。

・D 幼児

全部の音について不正解を示した。今回の訓練では、絶対音感が付かなかったと推察する。違った音の中から正しい音を見出すことは、かなり音に対する認識が必要な為、D 幼児については、音の認識がまだ薄いものと推察した。

(4) 2回目から10回目までの音感確認の結果について

・A 幼児

7回の「レ」の音についてのみ不正解を示したが、他は全て正解であった。正解率としてはかなり高い数値を示している。このことは、A 幼児の9ヶ月の

ピアノ学習経験が影響されているものと考えられる。母親からの聞き取り情報によるとピアノ教室では、このような音当てをピアノレッスン終了後、毎回数分間ピアノの先生が行っていたという。また家庭の日常生活でもレッスンの復習を行っていたというのでこの正解率の高さは学習経験の影響が大きいものと推察する。「レ」の音が不正解になったのは、A 幼児が答える際に何らかの影響により集中力が欠けてしまったものと推察する。

・B 幼児

2回、3回、4回目までは不正解が多かったが、それ以降、6回目の「ミ」を除いては全て正解を示した。B 幼児については如実に訓練の効果が出たと推察する。B 幼児は、2歳の時から企業系音楽教室へ通っているが、内容的にはグループによるリトミック³を中心とした音楽活動とピアノのグループレッスンであった。個人的には音当てのような訓練は受けていない。B 幼児にとっては、音に接する環境が十分に備わっていたことが良い効果を示したものと推察する。

・C 幼児

4回目の「ミ」の音のみ不正解を示した。この事は何らかの影響により集中力が欠け、不正解になってしまった可能性が高いと推察する。訓練を始めて間もない2、3回については5音全てが正解、4回目の不正解だった音は、比較的取りやすい、長調の主要3和音の第3音である事、またC 幼児の音楽学習情報の企業系音楽教室の学習教材においては、比較的多く出てくる音である事が理由である。

・D 幼児

この幼児については傾向があまり出ていないが、音の正解数から考察すると「ド」は9回中7回、「レ」は9回中4回、「ミ」は9回中1回、「ソ」は9回中3回の正解を出している。この事は、訓練を重ねていくことにより学習の成果が現れ、音が認識できるようになったと推察する。今回の訓練では、絶対音

感の習得についての有用性を得ることができなかった。有用性を得ることができなかったのは、D 幼児の家庭環境が大きな原因と推察する。現在のところ D 幼児は、音楽教室での学習経験もなく、家庭においても音に触れる時間が殆どなかった。

6 おわりに

子どもに絶対音感を身に付けてもらう為に、この度ガラスコップという楽器以外の物品を用いたが、その目的は2つのことを明らかにすることであった。

①音高がしっかりしている物品であれば絶対音感には身に付く。

②音を自発的に求める行為を示せば集中力が増し、短時間で絶対音感には身に付く。

本来、音感教育を考える場合、音程の正しい楽器を使って教育がなされるべきものと考えられていた。特に絶対音感の習得については、他の音に関連付けずに音を認知し名指できる能力なので、使用する楽器も慎重に考えられていた。しかし、今回の訓練では必ずしも楽器を使用しなくても絶対音感には身に付くことが明らかになった。特にB 幼児については、2歳の時から企業系の音楽教室に通いながら音楽に接していたが、4回目までの音感の確認においては絶対音感を確認することができなかった。企業系の音楽教室ということで楽器環境は整っていたはずである。家庭には電子ピアノがあり、自由に音を出すことができ、練習もできる申し分のない環境であった。またB 幼児の母は、子どもの頃にピアノを習っていた経験があり音楽には大変理解があった。つまり環境や背景が整っていても能力は身に付いていなかったのである。しかしながら、ガラスコップで訓練を続ける中、5回目以降、音が認識できるようになり、他の音に関連付けずに音を作ることができた。つまり絶対音感が付いてきたのである。

またガラスコップは、1回目に幼児たちが無邪気にガラスコップを叩き、興味を示したことから分かるように、普段考えもしなかった物が音程を作り、楽器

になったので、幼児たちに好奇心を抱かせ、学習意欲と集中力を増進させることになった。身近な物で有るが故に子どもたちは興味を持つことになった。

絶対音感とは、よく特別な能力であり、特別な楽器を使い、特別な訓練を受けないと身に付かないものと思われていたが、特別な能力でもなければ、特別な訓練を受けなくても身に付くものであるということがここで明らかになった。いわゆる字を覚えたり、計算ができるようになったりする能力と何ら変わりのないもので、訓練を繰り返し重ねていけば誰でも身に付く能力なのである。大切なことは、大人が課題目的達成のために子どもたちの環境を如何に整備し、自発的な学習意欲と集中力を高めていくことである。

今回の訓練は、楽器の無い教育現場を想定し、ガラスコップという身近な日常生活品を使用しての訓練であった。楽器の無い環境でもガラスコップで絶対音感身に付けることができたということは、音環境が少ない教育現場にとって今後の訓練法として期待したいものである。本研究において被験者となる幼児の学習、音環境、背景にばらつきがあったが、今後は条件を整え、効果的な訓練法を見出していきたい。教育現場には、子どもたちの好奇心を抱かせる素材はまだ多く存在する。大人は社会の変化をしっかりと認識し、環境を整え、子どもの目線に立って大切な幼児の感性と能力を開花させていきたいものである。

[註]

- 註1 愛知県名古屋市昭和区1-13-1 中部楽器技術専門学校
- 註2 音を合わせる時の集中度の高さは、中部楽器技術専門学校の実習訓練で確認できた。
- 註3 ジャック＝ダルクローズ (Dalcroze E, J 1865-1959) スイスの音楽教育家、作曲家。聴音能力を養う必要性を痛感し、「リトミック」の方法を作り出した。
板野 平, 音楽大辞典第3巻, 平凡社, 1982, p.1071

[引用・参考文献]

- 1) 浅香 淳;新音楽辞典 楽語, 音楽之友社, 1977, p.315
- 2) 浅香 淳;新音楽辞典 楽語, 音楽之友社, 1977, p.326
- 3) 浅香 淳;新音楽辞典 楽語, 音楽之友社, 1977, p.118